

楊家将演義 読本・目次

まえがき

岡崎由美…… 1

『楊家将演義』にまつわる解説

『楊家将演義』前後の歴史小説

大塚秀高…… 8

『楊家将演義』について——『北宋志伝』と『楊家府演義』とその祖本

松浦智子…… 22

『楊家将演義』の舞台となった時代

唐宋五代から宋代にかけて——英雄たちが活躍した激動の時代

馬場昭佳…… 46

宋代の時代的特徴とは何か

王 瑞来…… 59

架空の現実に生きるひとびと——『楊家将演義』のなかの軍職

伊原 弘…… 78

『楊家将演義』の時代における社会情勢について

勝山 稔…… 90

——都市生活と婚姻事情を中心に

勝山 稔…… 90

『楊家將演義』と演劇との関係

元・明演劇における楊家將物語
舞台の上の『楊家將演義』
京劇の楊家將物と現代中国

小松 謙…………… 106
細井尚子…………… 117
平林宣和…………… 135

『楊家將演義』の様々な視点

『楊家將演義』の虚実からみえてくるもの
映像メディアに於ける『楊家將演義』——映画とテレビの世界
日本人は中国の歴史小説をどう読んできたのか
——「通俗軍談」を中心に

上田 望…………… 150
中林史朗…………… 163
川 浩二…………… 190

楊家將物語の神仙説話

二階堂善弘…………… 205

家で楽しむ「楊家將」年画

三山 陵…………… 213

楊家將小説の版本と挿画をめぐる

上原究一…………… 253

『楊家將演義』資料編

楊家將演義人物事典

土屋文子…………… 274

【楊 家】

楊業・余太君・楊大郎・周夫人・孟四娘・楊二郎・耿金花・鄒蘭秀・楊三郎・董月娥
・楊四郎・瓊娥公主・楊五郎・馬賽英・楊六郎・柴夫人・重陽女・楊七郎・杜夫人・
楊八娘・楊九妹・楊宗保・穆桂英・楊文広・百花公主・黄瓊女・单陽公主・王貴・岳
勝・焦贊・孟良

【呼延家】

呼延廷・呼延贊・金頭馬氏・耿忠・馬忠・馬坤・李建忠

【宋王朝】

宋太祖・宋太宗・宋真宗・八王・柴玉・王欽・王全節・寇準・高懷亮・高懷徳・呼延
頭・呼延達・謝金吾・曹彬・趙普・潘仁美・楊延漢・楊光美・李漢瓊・劉廷翰・劉青

【北漢国】

劉鈞・趙遂

【遼 国】

蕭太后・蕭撻懶・蕭天左・蕭天右・韓延寿・師蓋・張華・土金秀・耶律学古・耶律休
哥・耶律奚底・耶律沙・耶律尚

【西夏国】

殷奇・三太子・束天神・李穆

【仙 界】

鍾離権・呂洞賓・椿岩・智聡

「楊家將演義」関連地図

(◆五代十国、燕雲十六州とその周辺、北宋・遼・西夏)

岡崎由美・松浦智子…………… 309

まえがき

岡崎由美

本書は、勉強出版から同時刊行される翻訳『楊家将演義』(上・下巻)を、より深く楽しむための解説書です。解説書とはいえ、中国の歴史、文学、演劇、民俗文化等の分野の最先端の研究の成果が、わかりやすく開陳されていますので、関心のあるところ、どのページから読み始めていただいてもかまいません。『楊家将演義』をテーマにはしていますが、本書の自身は、『楊家将演義』を通して見る、中国伝統文化史の万華鏡だと思ってくださいれば幸いです。

さて、そもそも『楊家将演義』って何、という方々には、それこそ小説本編の『楊家将演義』と本書の解説をお読みいただきたいのですが、簡単に言ってしまうと、明代の通俗戦記小説で、北宋の時代を背景としています。中国の北方地方を舞台に、北宋と遼(契丹)の戦いに身を投じた楊家の将軍たちを主人公とした群像劇です。父が将軍で、母が将軍で、七男二女の兄弟姉妹が将軍で、夫が将軍で妻が将軍で、孫が将軍でその嫁が将軍……こんな小説はちよつと日本にはないでしょう。楊業を当主とする楊一族は、『宋史』にも伝のある実在の一族ですが、そこに七、八割がたの虚構を加えて歴史英雄戦記に仕立て上げたものです。父母、兄弟、夫婦によるファミリー軍団が主役の『楊家将演義』は、後に「家

將』小説と呼ばれる一種の小説ジャンルの代表格となりました。元来中国の英雄戦記物は、日本の真田十勇士どころではない、英雄豪傑が束になった軍団ものが好きですが、乱世の群雄とその家臣団が割拠する『三国志演義』や、在野の豪傑が義兄弟の杯で結ばれた『水滸伝』とは、ちよつと作りが違っています。

女が將軍とは荒唐無稽な、と思われるかもしれませんが、中国には古来、唐の太祖の娘平陽公主が率いた、女性だけの軍事支援部隊である娘子軍や、南宋末農民反乱軍の女頭領で楊家梨花槍の使い手と伝えられる楊妙真、あるいは『明史』の列伝に名を遺した女將軍秦良玉、など、果敢に戦闘に身を投じた女性たちの伝承は数多くあり、あながち根拠のないイメージでもありません。ちなみに明代の江南のお祭り、花柳界のお姐さんたちが楊家の女將軍たちに仮装して練り歩いた、という記録もあります。楊家の女將軍たちは虚構のキャラクターですが、古くからお祭りのコスプレに使われるほど著名であったのは確かです。『楊家將演義』は、北宋の史実を背景にして活躍する男たちの群像もさりながら、実は「楊門女將」と呼ばれる楊家の女將軍たちも、この物語を広める原動力となっていたのです。特に、楊家のゴッドマザー余太君、その娘の八娘と九妹、楊六郎の妻で、「郡主」（王家の姫君に用いる称号）と呼ばれる柴夫人、元山賊の大姐御で楊宗保の押しかけ女房になった穆桂英などは、いずれ劣らぬ男勝りの強者です。こういう女戰士の存在感も、日本でよく知られた『三国志演義』や『水滸伝』と一味違うところでしょう。中国でドラマ化されると常に、この「楊門女將」にキャスティングされる豪華女優陣が話題になるところであり、ヒロインは穆桂英です。

中国では、現在に至るまで長く人口に膾炙した物語は、小説のみならず、演劇やら口承芸能やら、あるいは絵画や民間工芸品のモチーフやら、マルチメディアで発達し、広まり、そして現代なら、映画やテレビドラマ、アニメや漫画、ゲーム等で広く知られています。『楊家將演義』も例外ではありません。中国では極めてよく知られた物語であるだけに、中国の人々は小説だけでなく、芝居も伝承もドラマもひつくるめて、なんとなく全体としての「楊家將」物語を知っているところでしょう。この点は、我が国の民間における忠臣蔵や戦国武将物語、幕末の志士物語に対する物語観に似ています。つまり、『楊家將演義』もまた、中国の文化史に深く浸透した物語であり、その小説作品としてのあり方も、背景となる歴史と共に、マルチメディアの中に位置づけられるもの、ということになります。そこで、本書では、『楊家將演義』を楽しむために以下の四種のメニューを用意しました。

『楊家將演義』にまつわる解釈

『楊家將演義』とはどういう小説か、という小説そのものに関する解説です。

『楊家將演義』前後の歴史小説』では、中国の歴史小説の成り立ちとその中で『楊家將演義』の位置づけについて解説します。また、『楊家將演義』について——『北宋志伝』と『楊家府演義』とその祖本』では、小説の内容を取り上げます。『楊家將演義』は様々なエピソードがあり、またストーリーの異なるバージョンがあります。それらを比較しつつ『楊家將演義』の形成と発展を解説します。

『楊家将演義』の舞台となった時代

歴史背景の解説です。唐末から五代十国を経て北宋という時代は、やはり日本人にとってはちょっと遠い時代でしょう。或いは昔、世界史の授業で五代十国を覚えるのが面倒だった、という方もいらっしゃるかもしれません。しかし、本書を読んで、そういつた国名の羅列だけの中国史とはおさらばして下さい。

まず、「唐末五代から宋代にかけて——英雄たちが活躍した激動の時代」と「宋代の時代的特徴とは何か」では、単に歴史の流れを解説するのではなく、楊家将を誕生せしめた時代の特色や価値観、歴史の構造について解説します。「架空の現実生きるひとびと——『楊家将演義』のなかの軍職」では、『楊家将演義』が戦記小説であり、様々な地位、身分の軍人たちが登場することから、宋代の軍制と官職について解説します。「『楊家将演義』の時代における社会情勢について——都市生活と婚姻事情を中心に」では、『楊家将演義』の風俗描写の背景という観点から、「都市化」と「婚姻」をキーワードに、いわゆる中国近世における社会情勢の大きな変化の特徴を解説します。

『楊家将演義』と演劇との関係

『楊家将演義』が広く人口に膾炙するにあたって、演劇は大きな影響力がありました。

「元・明演劇における楊家将物語」では、小説成立前に流布していた演劇の「楊家将」物語および小説への影響について解説します。「舞台の上の『楊家将演義』」は、現在も演じられている中国の伝統演劇における「楊家将」について、文字を読む小説とは異なる、舞台としての特徴や面白さから解説します。「京劇の楊家将物語と現代中国」では、京劇の楊家将物語の上演・演出の変革を通じて、現代中国の政治的あるいは文化的状況との関わりを解説します。実は、京劇の日本公演でも『三岔口』などはしばしば演じられています。小説のみならず、舞台の楊家将にもぜひ親しんで下さい。

『楊家将演義』の様々な視点

小説・演劇以外のマルチな視点から『楊家将演義』を取り上げました。

『楊家将演義』の虚実からみえてくるものは、史実と虚構の関わりから、『楊家将演義』がどのように娯楽小説として成り立ってきたかということを解説します。「映像メディアに於ける『楊家将演義』——映画とテレビの世界」は、タイトル通り、今でもリメイクが繰り返されている『楊家将演義』の映画・ドラマについて紹介、解説します。DVDレンタルされている作品もありますので、そちらもお楽しみ下さい。「日本人は中国の歴史小説をどう読んできたのか——『通俗軍談』を中心に」では、江戸から近代の日本における、中国歴史小説の受容史を解説します。実は、『楊家将演義』の中国語原著は江戸時代に早くから日本へ伝わっていました。しかし、本解説にある通り、現代に至るまで日本語訳は刊行されていません。今回の翻訳は本邦初訳となります。「楊家将

物語の神仙説話」では、楊家将物語に登場する神仙や妖術を通じて、中国民間の宗教文化を解説します。「家で楽しむ「楊家将」年画」は、中国の旧正月に門戸に貼る縁起物の版画「年画」のモチーフを取り上げ、『楊家将演義』が中国の民間伝統美術の中にどのように浸透し、楽しまれていくかを解説します。「楊家将小説の版本と挿画をめぐる」は、明代の様々な楊家将小説のテクストを挿絵から読み解きつつ、楊家将小説として刊行された書物そのもののあり方かたやその背景となる明代の出版文化について解説します。

以上に加え、巻末に「楊家将演義人物事典」と「楊家将演義」関連地図を附しました。「人物事典」では、翻訳の底本とした『北宋志伝』の主要登場人物を取り上げていますが、楊家将小説の別バージョンである『楊家府演義』との設定や名称の比較も加えています。

このように本書は、「まるごと楊家将」読本であると同時に、中国の歴史や文化に多面的に触れる機会も提供したつもりです。『楊家将演義』という、日本人にとってはちよつと毛色の違う戦記小説と、それを生み出した想像力豊かな中国文化の世界をどうぞお楽しみください。

注

(一) 明・范濂『雲間拋目抄』巻五「風俗」、明・王禪登『呉社編』。